

図書だより

〈第29号〉
 平成5年10月29日
 呉工業高等専門学校
 図書委員会



パソコンでCD-ROMを検索している。

目 次

〔表紙〕	1
〔巻頭文〕 図書館と計算機 図書館長 鍋本 暁秀	2
〔読書感想文〕		
文学 「太郎物語」(曾野綾子著) M 2 伊藤 綾美	3
「はつ恋」(ツルゲーネフ, I. S. 著) E 2 吉見 和幸	3
歴史 「若き日の毛利元就」(伊藤正一著) M 1 茶山 充博	4
「武田信玄」(木暮正夫著) E 1 柳坪 孝志	5
政経 「検証・天皇報道」(成澤壽信編) C 3 重本 幹成	5
「難民問題とは何か」(本間浩著) A 3 沖本和香子	6
〔随想・読書雑感〕		
「図書館体験記」 M 4 福増 秀彰	6
「ミスプリントは困る」 M 5 土井 博利	7
「アメリカよ! あめりかよ!」(落合信彦著) E 4 丸田 秀昭	7
「銀河鉄道の夜」に見る理想郷(宮沢賢治著) E 5 松岡 哲次	8
「十五少年漂流記」(ベルヌ, J 著) C 4 藤本 達也	9
「史記」(司馬遷原作) C 5 島村 慎	9
「地震と建築災害」(宇佐美龍夫著) A 4 島田亜麻里	10
「風の変様体-建築のクロニクル」(伊藤豊雄著) A 4 中野美良子	11
〔新任教職員随想〕		
「不思議の国の呉高専」 一般科目 木原 滋哉	12
「私の学生時代」 学務専門員 上中 達男	13
「私の初マラソン」 出納係長 山根 義則	14
「変わる仕事と自分」 学生課 池元浩一郎	15
〔私の推薦する本〕		
ライアル・ワトソン著「生命潮流」工作舎 一般科目 白川 洋二	16
土質工学会編「土質工学数式入門」土質工学会 土木工学科 小堀 慈久	17
森口繁一〔ほか〕著「Pascal プログラミング対話」共立出版 建築学科 間瀬 実郎	17
〔新着図書30選〕	19
〔お知らせ〕 図書館からのお知らせ	23
〔編集後記〕 図書館長補 篠部 裕	24

巻 頭 文

図 書 館 と 計 算 機

図書館長

鍋本 暁秀



最近の図書館における計算機の働きぶりには、ただただ感心するばかりである。

キーボードから指示をすれば、求める本が図書館にあるかどうか即座に表示してくれる。文部省学術情報センターのネットワークシステムに接続すれば、全国の大学図書館の図書、学術文献情報も即座に引き出してくれる。

これまでは、本を探してのカードめくりや研究論文の文献調査などに、かなりの時間と労力を要していたのに、今では計算機があつという間にそれを代行してくれる。

それだけではない。キーボードから指示をすれば、百科事典や国語辞典などの項目も画面に表示してくれる。美術全集なども綺麗な色で表示するらしい。辞典類、講座ものなど、続々とソフトが市販されているというから、今後が楽しみである。

もともと、計算機は計算のために開発されたものである。それが今では、ファイル処理や制御などの分野で大活躍という。中でもファイルにデータを記録したり、それを取り出したりするファイル処理機としての用途が最も多いということで、図書館の場合がまさにそれである。

文部省学術情報センターは、図書及び学術文献情報を収集し、その利用を計る大学共同利用機関として、また学術情報システムを研究開発する研究施設として、昭和61年に発足している。年毎に生産される膨大な学術文献情報を整理登録するのも大変な仕事であるが、蓄積されたデータベースから必要な情報を検索して取り出すのは、さらに大変な仕事であろう。それを一手に引き受けているのが、学術情報センターの計算機で

ある。

平成3年度に更新された学術情報センターの計算機システムは、中央処理装置4台を備えた HITAC M-880/420 (主記憶2GB、拡張記憶6GB) および中央処理装置を2台備えた HITAC M/880/210 (主記憶2GB、拡張記憶2GB) を結合した汎用超大型計算機システムで、データを保存する磁気ディスクの容量は1テラバイトを越えて、拡大を続ける情報に十分対応できるという。

このど偉い計算機を全国どこからでも、またどんな計算機からでも利用できるようにしてあるというから感動する。北は北海道の北見工業大学から、南は沖縄の琉球大学までの、学術専門のネットワークシステムがそれを支えているという。本校の場合、東広島市にあるシステムの通信拠点に接続すれば利用できるようになってい

る。このシステムは、全国の大学、短大、高専の研究者および図書館が、相互に情報交換ができるように計画されており、今後高専の加入が進めばその実現も間近ということである。

このシステムを使って文献複写を依頼すると、計算機が引き受け先の図書館を探し出し、直ちに引き受け先から回答があるという。また、複写物が発送された段階、到着した段階で、システム上で図書館間の事務処理が行われるという。図書館事務も、今や計算機とネットワークシステム無しには過ごせない時代に入ったといえよう。

また、このネットワークは、海外の図書館とも情報交換ができるように、国際専用回線により米国と英国の拠点的な機関と接続されているという。居ながらにして、世界の学術情報を手にできるようになったのである。

計算機と通信技術のおかげで、図書館を巡る環境が変わってきた。技術革新の結晶ともいえる、学術情報ネットワークシステムと図書・学術文献情報の共有資源を、今後いかに活用するか、われわれにとって大きな課題である。

読書感想文

文学

「太郎物語」

(曾野 綾子 著)

M 2 伊藤 綾美

主人公、太郎君の家庭は、私にとっても、むろん作者にとっても、理想的な家庭だと思います。太郎君の父親、山本正二郎に対し、太郎君は小学3年生の時、テレビを禁じられたことに反発し、「テレビ無しでなんか生きられないよう」とただをこねた。すると、父はテレビを庭の敷石に叩きつけた。「テレビが無いと生きていられないかどうかやってみろ！」

これだけのことをやってのける父親っていうのは、現代の日本には、まずいないだろうと思われまふ。また、高校入試の時、国語の問題で、「次の作者と作品を結べ」というのが出た。この太郎君の答案を聞いて、山本正二郎は「これだけ完全にまちがえるのは、むずかしいやな。よくやった。」母親の信子は笑い転げた。この出来事と、全く正反対な家庭が藤原家でした。藤原君の両親、特に父親は、東大出身の人でないと人間ではないと言っていた。これが、今現代の物の見方の象徴だと思います。東大が悪いとか言ってるわけではないけど、世間一般に私も含めて「東大出身です。」と言っただけで少し尊敬の目差しで見ってしまう。そうじゃない。どこだって変わらない。要は、そこでどれだけの功績をあげるかだと思います。

太郎君は、山本正二郎と人生について少しモメた。太郎君は、「北川大学受けるのね、はっきり言うと、世の中の、藤原のおやじみたいな奴に反対するためなんだ。」と言った。しかし山本正二郎は「どっちにしてもあやまちだ。若気のあやまち以外の道を歩くことはできない。」と言いついた。それでも反抗するんだといいはる太郎君に信子は、「革命をやろうとする人はね、一人で一生かけて静かにやるべきなのよ。一生やっても何の効果もでなくてもいいの。」この会話には、父親と母親の深い愛情が感じられると思います。

子供の意志を受けとめ、少しばかり助言してやる。表面ではお互いけなしたりしてはいるけど、内面では信頼し合っているのだと思います。

けっして、山本正二郎は父親らしく、信子は母親らしくはありません。しかし親と子がどちらも信じ合っているから、こんな人間関係ができるのだと思います。また、こういう太郎君のような、自分自身の考えを持った人間がうまれてくるのだと思います。

なにもかもが新鮮さの裏返しに嫌悪感が見えてくる高校時代の太郎君を、静かにやさしく見守っている両親の姿が、また太郎君の生き方、考え方がとてもすばらしいと思いました。

「はつ恋」

(ツルゲーネフ 著)

E 2 吉見 和幸

ある日突然、誰かのことが気になり始める。それが恋である。その初めてのものが初恋である。しかし初恋は後に経験する数多くの恋とは異なるのである。恋という感情が初めてである為、何も求めずに相手を純粋に愛することが出来るのである。

『はつ恋』の主人公16歳のウラジミールは、別荘で零落した公爵家の年上の令嬢ジナイエダと出会い、恋に落ちる。彼女は彼を子供扱いする。ウラジミールは必死に大人ぶってみたりするが相手にされない。そのうちにジナイエダもウラジミールのことが気になり始める。しかし、二人の恋の間に邪魔が入る。ジナイエダが誰か他の人に恋してしまったのである。

ウラジミールは彼女の周辺をみはった。そしてある夜、悲しい事実と直面する。ジナイエダの恋の相手は、ウラジミールの父だったのである。父はジナイエダとつき合いを深めていた。彼女と父の交際が母の耳に入り、ウラジミール一家はモスクワに引き揚げることになった。ジナイエダとの再会の為、彼女の結婚先に出向くと、彼女はすでに亡くなっていた。彼が訪れる4日前である。

あまりにも悲しい話だった。己の愛する人に思いを

よせても受けとめてもらえない。相手の気持ちが揺れ始めると、自分の父親に横取りされてしまう。そして突然おこる一生の別れ。自分が彼ならば、もう恋はしたくないというのが本音だ。また、父親をひどく恨むだろう。しかしウラジミールは父を恨むどころか、前よりさらに尊敬してしまうのである。これも恋の不思議な所である。

これまでも考えたことはあるが、この本を読み終わって、また深く考えたことがある。なぜ恋をする、つまり人を好きになるのかである。人を好きになりさえしなければ、悩むこともない。自分も傷つかない。相手も苦しめない。周りにも迷惑をかけずにすむ。友も家族も、名誉も、地位を失わずにすむ。しかし人は、それらすべてを犠牲にしても恋をする。自分もやはりその人々のうちの一人である。突然心に火が灯り、だんだん激しく燃え上がり、消そうとしても消えず、さらに燃え上がり、ある時を境に火の勢いが弱まり、ついには消えて、やがて甘く苦い思い出となる。僕はこれからも多くの恋をするだろうが、はつ恋の感情で相手を愛する恋をしていきたい。

歴史

「若き日の毛利元就」

(伊藤 正一 著)

M1 茶山 充博

この書物は、題名の通り、「戦国一の謀略の智将」と呼称された、毛利元就の若りしころのことを記したものである。「謀略の智将」と呼ばれるまでの生いたちには、どんなものがあつたのか、私もつねづね知りたいと思っていたところ、この本が見つかった。

元就は、幼名を松寿丸といった。彼は、母を幼いうちに亡くし、兄や乳母役に見守られて育つたようだ。母が自分の小さなころに他界する、というのは大きなビハインドとなるはずだ、しかし、彼はそれをものともせず、たくましく生きた。

しかしながら、第二のビハインドが彼にのしかかってきた。今度は、父・弘元が急死したのである。5才で母、次いで10才で父を失った彼には、悲哀が多分感じられる。きっと、私ならその重圧に耐えかねてい

たに違いない。しかし、彼はそのビハインドから、さらに多くのことを学ぼうとするのである。彼のこの性格は、父母を喜ばせたいがため、また、平和な生活を神仏に感謝するために、と叡島神社へ参詣する、という行動を取らせたのだ。ただただ驚くばかりの積極性だ。

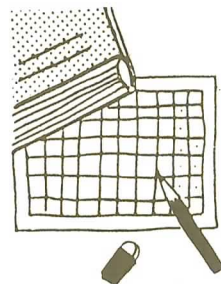
さらに、彼の注意力の鋭さは、後をつけていた旅商人らしき者が、自分の警護役であるということを悟っていたことから分かる。部下が「この子は立派な将になるだろう」と考えたのも、しごく当然だろう。

やがて彼は元服し、「元就」という名を受けるのだが、実は毛利の主は、元就の父を初めとして皆若死にしているのだ。だが、彼はそんなジンクスをものともせず、戦国の嵐の中を駆けぬけるのだった。本当に彼は強者、真の猛者だな、と思えてやまない。

だが、元就も大内と尼子の谷間でもがいたであろうことは当然である。しかし、それをものともしないのが彼の彼らしいところであろう。二大勢力のらみあいの中で、元就はメキメキと力をつけていったのだ。尼子から安芸を乗っとった智略は、筆舌につくせるものではない。恐るべき才能は、きっと、天性によるものだけではないはずだ。幼いころより、兵法を学び続けた努力のたまものであろう。努力する者が勝つ、彼はそんなことを教えているような気がする。

そして、自分の次男元春を吉川に、三男の隆景を小早川に養子に出したことにより、彼はやがて中国地方を統一していくのである。ここで語られた「三矢の教え」は余りにも有名であるが、これは意外にも聖書と共通した点がある。どちらも、協力することの大切さを教えている。

智将・毛利元就—彼の生きざまは、私たちに多くのことを教えている。私は、改めて彼の智略に感服した。やはり、戦国を生き抜いた男だ、と思えてやまない。



「武田信玄」

(木暮 正夫 著)

E 1 柳坪 孝志

晴信が初陣で海野口城が平賀源心を三百の手勢でうちとったのはさすがだ。父、信虎が八千の兵でせめてもおとせなかったくらいだから、よほど守りの堅い城だったろう。それを引くと見せかけて相手を油断させ、急襲して勝つんだから見事としか言いようがない。しかし、これだけ見事に勝っても信虎は晴信を褒めなかった。晴信をきらっていたから褒めなかったかもしれないが、もしかしたら晴信の戦の才能に嫉妬していたからかもしれない。

それから父を追放して甲斐の領主になり、諏訪氏をやぶった後、晴信はのちに「武田の軍師」といわれる山本勘助をめしかかえた。勘助は駿府に住んでいながら、みかけで今川氏はめしかかえなかった。もし今川氏が勘助をめしかかえていれば、桶狭間で今川義元が織田信長にやぶれるということもなかったかもしれない。

晴信は生涯で二度、戦に負けたが、その相手は二度とも村上義晴だった。上田原では板垣信方ら重臣数名がうたれ、戸石城でもたくさんの死者をだした。でも、この二度の敗戦をこやしにして無敵の武田軍団ができたのだから、村上義晴にお礼をいうべきかもしれない。この村上義晴がたおせたのは、めしかかえた真田幸隆のおかげだから、武田軍が無敵だったのはすぐれた重臣がたくさんいたこともあるだろう。

4回目の川中島の戦いでは、勘助の「きつつき戦法」が上杉謙信に見破られ、勘助や信玄の弟、信繁が戦死した。謙信は城からあがる炊事のけむりがいつもより多いから、この作戦に気付いたのだが、信玄ははこのことに気付かなかったかな。このとき、裏をかいて謙信が山からおりてくるのを全軍でまっていれば、信玄は大勝していたかもしれない。

三方ヶ原の戦いでは、家康軍に大勝した。信玄は家康をあっさりたおすぐらいだから、そのころでは最強の戦国大名だったのだろう。信玄の領地が東海で京に近かったら歴史は大きく変わっていただろう。

政経

「検証・天皇報道」

(成澤 壽信 著)

C 3 重本 幹成

世に言う菊タブーというものがある。天皇や皇室に関する「言ってはならない事」をそう言っているのだ。明治のころから続いて来たこのタブーが言論の自由が保障されているはずのこの国でいまだに存在していることを昭和天皇の死去でまざまざと知らされた思いがする。新聞もTVもほとんど全てのマスメディアが天皇を翼賛し、戦争責任を全く問うこと無くあたかもすでに終わった事としてうやむやにってしまった。

しかし、このことは政府が圧力を加えた結果では無かった。マスメディアが自主的に行ったという事が何より問題なのである。天皇制そのものより、報道管制がいつも簡単に行われる体質や、天皇制をサポートしたり利用したりするシステムの方がむしろやっかいな代物だと思う。日本人の持つこの様な体質が菊タブーを残し、ひいてはそれを再び肥大化させているのではないだろうか。

菊タブーを打破する事は容易な事ではないが日本が真の民主国家になるためには必ず越える必要のあるものだと思う。菊タブーの中でも特に天皇の戦争責任は絶対にうやむやにしてはならないと思う。戦前日本の指導者であった天皇が戦争に対して責任を負わないはずはないし、それをはっきりとさせなかったばかりに日本が起こした戦争への責任も反省も何もぼかされてしまったのではないのだろうか。過去にやったことをきちんと清算せず、教訓としてきちんと後世へと伝えようとしないから戦前への逆行を望む人間が勝手な事をしてそれを許してしまうのではないのか。ほんの些細な事、例えば皇族に対し敬語を使うことにしても、皇族は誰もが敬わなければならない特別な人間だから敬語を使って当たり前という大前提が暗黙のうちに存在しているからこそ成り立つのである。無関心でいることこそが一番良くない。最初の少しの変化を見逃し続ければ気付いた時にはもはや手おくれになってしまいうであろうからだ。

「難民問題とは何か」

(本間 浩 著)

A 3 沖本 和香子

ここ数年、難民という言葉がニュースなどでよく耳にするようになった。世界の難民状況は1990年現在、アメリカ合衆国には100万人、中国28万人、イギリス10万人、日本8,400人というように4つの国を掲げただけでもこんなにたくさんいることが分かった。

そもそも私は、難民という人達は、自分の国が貧乏で、もっと楽な暮らしがしたいがために他の国に逃げ込むけれどもない人達だと思っていた。だから現在の世界経済の仕組みにおいて、最大の受益国の一つである日本に行けば少しは生活が楽になるだろうと思い、たくさんの難民が日本にやって来るんだと思っていた。ところが難民という言葉の定義は、私の考えているような生半可なものではなかった。

1951年、ジュネーブ会議で難民条約を採択した。この条約の第一条に難民の定義が次の様に定められていた。難民とは、「人種、宗教、国籍若しくは特定の社会集団の構成員であること、又は政治的意見の理由で」迫害を受けるおそれがあるという恐怖があるために国外にある者である、と定められた。また、「内乱、内戦、外国の支配、政治的、経済的混乱を逃れて国外にある者や、アフリカ各地での飢餓状況を脱するために、他国に移動せざるを得ない者」も

難民として取り扱われることになった。この定義を知って、初めて難民と呼ばれる人達が小さい船にいればい乗って死を覚悟でやって来るのか分かった気がした。

難民を受け入れている国を比較すると、アメリカがひととき目立つ。アメリカはたくさんの難民を受け入れるだけでなく、国際的な難民保護制度をどの国よりも力強く支えてきた。それに比べて日本にいる難民の数は、経済先進国としてはあまりにも少ないと思う。面積が狭いからと言ってしまえばそうかもしれないけど、日本よりもはるかに面積が狭い国や、人口密度が高い国であるスイス、ベルギー、オランダ、デンマークの方が日本の3～4倍も難民を受け入れている事を考えるとなんだか寂しい気がする。

敗戦直後、植民地的支配地や軍事的支配地にとり残され、迷い迷って転々としていた日本人も、広い意味で難民になると思う。その子供であった人々が「残留孤児」として今でも日本にいるはずの肉親を探しているが、同じ日本人である「難民」となっている人達に対してもっと一生懸命になるべきだと思った。

これから日本人は、物とか金という物質的援助ばかりでなく、まず第一に難民の人達を受け入れられる社会環境を作っておく必要があると思う。それは政府にまかせるのでもなく、どこかの団体にまかせるのでもなく、日本人一人一人が日本社会に受け入れるために働きかけないといけないと思った。

随想・読書雑感

「図書館体験記」

M 4 福増 秀彰

図書館とは、皆さんにとってどんな所でしょうか。勉強、研究のための資料提供の場所、といった所ではないでしょうか。しかし、僕達にとっての図書館は、少し違うのです。では僕らにとっての図書館とは何か。それは出会いの場所なのです。

僕は頻繁には図書館に行かないので、最近の事はよく分かりません。しかし、また行くと、席に座る前にまず図書館全体の座席の状況を確認します。まず、

先生がいらっしゃるかどうか。これは重要なポイントです。先生がいらっしゃる場合、できるだけ遠くの席に座ります。先生がいらっしゃらない時は、続いて女性の布陣状況を見ます。一通り確認すると、お目当ての女がちょっと見える位の所に座ります。えっ、何故近くの席へ行かないかって？分かってないなあ。ちらっと見える位がおくゆかしくて良いんじゃないですか。何？おたく？暗い？そんな事言わないで下さい。どうせなら、日本の美を図書館で究めたスゴイ奴と言ってほしいですね。

さて、このあたりで話題を変えます。皆さんは、書庫に入った事がありますか。僕は高専に入って丸3年間、書庫に入れる事を知りませんでした。そして4年になったこの度、初めて書庫に入ったのです。薄暗い書庫の奥にはたくさんの為になりそうな本がありました。皆さんも一度は書庫に入って下さい。その書庫にある本の中で僕のオススメが「呉高専十年誌」と「呉高専二十年誌」です。これはすごい。呉高専創立からの20年間にあった数々のドラマがギッシリとこの2冊に凝縮されています。中でも、先生の写真は必見です。G先生の毛髪フサフサには驚きました。皆さんもぜひどうぞ。

最後になりましたが、余談をひとつ。夜、図書館が閉まった後に、学食の付近より図書館の左から2番目の窓を見ると、白い人の影が見えるとか。皆さんも確かめてみませんか。

「ミスプリントは困る」

M5 土井 博利

僕が高専に入学してもう5年目になる。この5年間というのは、今から思うとあつという間であった。今から4年前の入学式の日に教科書や参考書を含めて約20冊の本を購入した。それから5年間の間に約60冊以上の本を所有していることになる。

でも今ではそのほとんどが箱の中にしてあり、必要な教科書しか机上に並んでいない。これは僕だけではなく誰もがそうであろう。専門科目の本ならともかく、1、2年生の時に使用した教科書をもう一度見直したりすることは、まずないであろう。

そんな教科書の中にも良し悪しがあり、特に数学の本に多いのがミスプリントであった。

これは本当に迷惑であり、計算の途中経過よりも答えを先に知りたかった僕は、そのような本によく迷わされた。いくら計算しても、答えが出ないので、本の答えを見て逆算してもとの式にはならなかった。こういったことはしばしばあることで、結局その問題が自分の力では解けなかった。でも当時の僕は自分が努力することよりも教科書の方に腹を立てていた。高専や大学ともなると教科書が1冊2000円以上するのは当たり前前のである。17歳の時の僕には、そのような高価な本を買っても平気でミスプリントしてあるのが

1冊ならともかく2冊、3冊と次々に出てくると、何かだまされているような気分になってきた。そこで本を選んでいるのは、その教科の先生なのでもっとよく見て選んでもらいたいと思った。この意見を先生の側から言わせてみると、「この程度の値段の教科書ならよくあることだ。」というのを聞いた僕は少々ア然となってしまう。ミスというのは誰にでもあることなのでそうとやかく言ってもしかたのない事ではあるが教科書など本にして売っているような物はまた別だと思う。値段や内容には関係なく、本や教科書などはもう少し、しっかりと内容にしてもらいたいものだ……。

「アメリカよ！あめりかよ！」

(落合 信彦 著)

E4 丸田 秀昭

僕が帰省するには長い間電車に乗らなくてはならないので、その間本でも読んでいようと思ひ、買ったのがこの「アメリカよ！あめりかよ！」でした。この本を選んだ理由は、「落合信彦」という名前をテレビのコマーシャルで聞いたことがあり、書店でこの名前を目にして興味を抱いたからです。この本は落合さん自身がアメリカの大学に留学した時の話でした。僕は彼が留学を決意して、現地に辿り着くまでのところが気に入っているので、その部分を紹介します。

落合さんは母子家庭で兄が一人おり、酷い貧乏でした。本当に読めば読むほど悲しくなるくらい貧乏でした。落合さんのお兄さんは東大に一発合格するほどの秀才でしたが、落合家の経済的理由により進学を諦めてNTT（当時電電公社）の就職試験を受けます。しかし採用の内定をもらいながら、母子家庭ということで内定取り消し処分になってしまいます。失意茫然の兄と、激怒する母。NTTに抗議しても取り合ってもらえませんでした。この時落合さんは日本の大学に進学することに失望し、アメリカに留学することを決意するのです。

それからの落合さんの行動は凄まじく、特に積極的な英語学習には万人が驚くのではないのでしょうか。毎週日曜日は映画館に通ひ、洋画を1日中見て聞き取れた台詞をノートに書写しながらヒアリングの学習。また英和辞典を購入してその単語と内容を暗記し、覚えただけでなく1日1枚ずつ破り捨てることを

自分に課したそうです。当時過度の貧困状態にあった落合さんにとって、高価な辞典を暗記せずに捨てることは途方もない苦痛で、必死になって暗記したと記しています。ある程度自信がつくと、皇居前にいる観光客らしい外国人にガイドを買って出て自分の英語を実践しました。アメリカ大学で講義の内容を理解する為にはこれくらいのことはしなければならぬと考えたそうです。落合さんの決意の強さと行動力に感服すると同時に、焦りに似た気持ちが僕の中に起こるのを感じました。

英語の他にアメリカの歴史なども勉強して、授業料と生活費が全て賄える奨学金制度の試験を受けます。その時にこの試験を受験したのは落合さん唯1人だけだったそうです。受験する人がいないほど難しい試験でしたが、自費で、留学することのできない落合さんはこの試験に合格するしかありませんでした。そして合格したのです。

アメリカの大学に留学が決定してから問題がありました。アメリカまで行く旅費がなかったのです。落合さんは港の前にテントを張って待ち伏せし、アメリカから来た船があると、その乗組員に船長に合わせてくれるように頼みました。幾日も断られ続けた末、ボイラー室で働くことを条件によくアメリカ行きの船に乗せてもらえることになりました。留学する大学はアメリカの東側にあり、アメリカ西海岸に到着すると今度は大陸横断の旅です。彼はヒッチハイクをしながら横断の間、食費を切り詰めるために食事をほとんどコカ・コーラですませたそうです。

こうして落合さんは目的の大学に辿り着いたのです。彼が留学を果たすことができたのは留学への情熱と努力でしょう。とくに勉強への打ち込みようは僕に強い印象を与えました。彼は勉強すべきときに勉強し、目的を達成しました。僕は今学生で、勉強すべきときにあると思います。しかし日々の生活を振り返ってみるとそれができているとはとうい言えません。この本を読み進めていった中で僕が焦りを感じた理由はここにあると思います。

この本にはここで紹介した留学までの部分の他に、留学中のこと、卒業後のことが、特に落合さんの半生の中で大きな分岐点となった出来事を中心に書かれています。彼の実体験を通してアメリカという国の性格をかいま見ることができた1冊です。

「銀河鉄道の夜」に見る理想郷

E 5 松岡 哲次

「銀河鉄道の夜」言わずと知れた、宮澤賢治の作品である。この作品は、映画化されているし、また「銀河鉄道999」の元にもなっている。

この「銀河鉄道の夜」読むようになったのは、中学の時に姉から貰ってただ何となく読んでいたような記憶がある。最近思い出したように読み返してみると、前とはちがった新鮮な気持ちになった。この作品に登場する場面の一つ一つに、ふんだんに盛り込まれた自然の描写、夜空に散りばめられた星・星座・天の川等…。最近ではすっかり忘れかけていた自然の美しさを思い出させてくれた1冊だった。

では何故こんな気持ちになったのであろうか。簡単に言えば、住んでいる環境が県北の自然あふれる田舎から、呉という大きな街へと変化したためである。僕の地元では、夜、空が晴れていれば一面に星が見れる。実際人間の目で見れる星は、6等星ぐらいまでで見ることが出来るらしい。僕が見た最高の星の数は、小学校の時に友達とキャンプに行つて、あたり一面が真っ暗だった時に見たのがそうであろう。

しかし、寮の屋上に出て空を見上げてほとんど星は見えず、人に見られて、「何しよん。」と言われて恥ずかしいだけである。

夜空に星が見えない原因とは？言わずと知れたことで、空気が汚いからである。その証拠に去る9月3～4日にかけて広島にほとんど被害を及ぼさなかった台風7号がさった後、4日の午前4時ぐらいに空を見たら、けっこう星が顔を覗かせていたのである。都市開発が進むにつれ、夜空から星が消えてゆき、街の高台から逆立ちして街を見れば、一面の星のように見える。それはそれで綺麗でいいのかも知れない。しかしながら、それ以上の開発によって街の明かりでさえ霞んで見えなくなってしまったは何にもならないのである。

人間を地球上の生物の一種として見るならば、自然に頼って生きているのが本来の姿であれば、もっと自然と共存していかなければならないと思う。

そして、夜空一面に星が輝く生活したいと僕は思うし、また出来れば幸せだと思う。

「十五少年漂流記」を読んで

(ベルヌ、J 著)

C4 藤本 達也

このような災難に遭遇したのは、1人の少年ジャックのちょっとした心から引き起こったものだったが、それで15人の少年はすばらしい体験をすることになる。もっとも無事生きて帰ってこられたからだが。

さて、内容だが、15人の少年を乗せた船スルギ号が難破し無人島と思われる島に漂流した。そこで、リーダー格のゴードン、ブリアン、ドノバンが中心となり、他の上級生4人と、下級生8人がそれぞれ自分自身の個性を出しぶつかり合いながらも協力し合って、生き抜いていくという話だった。特に、ドノバン、ブリアンは互いに衝突が多かった。ブリアンはそれほどそんな風に意識していなかったがドノバンは意識していた。なぜかというと、ドノバンは学校の成績も優秀だし、運動神経もよいため、高慢な態度で特に、人気をとられたブリアンをずっとねたましく思っていた。そのため、船が嵐の中を航海している時から、ずっと敵意をあらわにしていた。また、島についてからもずっとそうだった。

ところで、島からの脱出方法はなかったのかと思われるが、船体がボロボロで、修復は不可能だった。残ったゴムボートも長距離を航海できるようなものではなかった。そのため、島内に冬でも住めるような洞穴を探し当てたわけだが、そこでやはり、リーダーを決める必要があった。その役に適任なのは、一番年上のゴードンになった。ゴードンはすばらしい思慮の持ち主で、何事にも慎重で知識も豊富だった。ゴードンは下級生にも厳しく、上級生にも自分にも厳しかった。この本を読んですばらしいなあと思った。なぜなら、島で少年達だけで暮らすためには厳しさがとても重要なため、あえて下級生に嫌われても仕方がないくらいしかりつけ、また的確な判断をし、いつもみんなの事を考えているからだ。ゴードンに負けるとも劣らない人物がブリアンとドノバンだ。ドノバンは初めは、誰にも負けないという気持ちが強かったため、ブリアンやゴードンによく反抗していた反面、認めている面もあった。ドノバンを素直にさせたのはブリアンの行動だった。島での生活が一年半くらい経過した頃、ブリアンがリー

ダーに変わっていたのだが、対抗意識があったドノバンはみんなと分かれて仲間4人と、別の洞穴で暮らしていたが、間もなくして、別の難破船が流れついた。それに乗っていた人物は悪人であることが分かったため、ブリアンは、ドノバンに銃を使わないよう、また、悪人にさらわれないよう探しに行っていた。その時、ドノバンがヒョウに襲われているのを発見したため、銃を使わずに短刀1つで助けたのだった。ドノバンも、彼の勇氣と優しさを感じとり素直になった。そうして、15人全員が一丸となり悪人を倒したのだが、1人かけても、これは成し遂げられなかったと思う。やっぱり、一人一人が自分勝手な事をせず協力していく事が大事だなあと思うとともに、ブリアン、ゴードン、ドノバン、その他の少年が少しずつ成長し、一人一人がわがままを言わず困難に立ち向かった結果だと思った。

「史記」

(司馬 遷 著)

C5 島村 慎

この本は現在から2200年前、漢の武帝の時代に書かれた歴史書です。しかしその古さに関わらず現代に充分通用する内容です。また、現在の年表の様なものではなく、幾人かの人物の生き方を中心とし、作者史馬遷の考え方も注釈としてついているのが変わっている点です。

この書の中で僕が最も興味を持ち、また惹かれたのは春秋五覇の1人宋の襄公です。史記の中で五覇の他の4人程記述が多くなく、わずか2つのエピソードがあるだけなのですがそのうちの1つに共感しました。その内容は楚との戦の場面なのですが、勝てる機会が3度あり、その都度丞相が進言するのですが、川を渡りきっていないとか、陣構えが整っていないとか理由をつけ、相手の準備が整うのを待ってやって戦うのです。結局宋は敗れ、襄公は矢を受け数ヵ月後に没することになります。

この襄公の行動は一見すると、亜類は100人中99人の人までが無能な君主の見本の様に思うでしょう。しかし史馬遷の評価がかなり高いことは注釈からうかがえます。また僕が惹かれるというのも、この春秋時代が戦に明け暮れ、人々が猜疑心を強くしていた中であって襄公だけが記録に残った中ではそれを可とせず、時

代の流れに逆らったという所を気に入ったからだと思えます。

また史馬遷の生きた漢の武帝の時代も、世の中が落ちつき、国が繁栄する中で官僚の力が増し腐敗が始まり出した時代ではないかと考えられます。そんな中であって己の命を捨ててまで義に生きたという襄公の行動を美しいものとしたのかもしれませんが。

ひるがえって、これは現代にも通ずることと考えられます。襄公の行動は真似するのは難しいですが、その考え方は現代においても重要なのではないかと思います。

「地震と建築災害」

(宇佐美 龍夫 著)

A 4 島田 亜麻里

先日、北海道沖において大地震が起きました。私は、地震直後からNHKの報道番組を一晩中見ていました。時間がたつにつれ、伝わってくる被害の状況を聞いてみると、自然の力の偉大さ、狂暴さにたいへん恐怖を覚えました。

わが国は、地震がたいへん多く起き、“地震国”という異名をとっています。日本における地震は、太平洋プレートのもぐり込みにユーラシアプレートが引きずり込まれ、それをある程度以上になると持ちこたえられなくなって発生する（プレートテクトニクス説）と説明されています。大きな地震が発生すると、津波、地割れ、火災、山崩れ、液状化等の災害が起こってきます。今回の北海道沖地震では、奥尻島において津波と火災で島が壊滅的な被害を受けていました。海岸に近い建物は全て、波にさらわれたり、火事で消失していました。

過去においても地震被害は多々あったようで、日本においてその記録は5世紀にまで溯ることができます。江戸時代ごろからはその資料も多く残っており、1850年度（江戸時代後期）ではほぼ年に1回は大きな地震によって多大なる被害を受けています。地震によって起こる災害は昔から同じようなものです。しかし、増えすぎた人口、多くの建物、石油タンクやガス等のライフライン、電機・電話の線、便利になった私たちの生活を支えているものは、昔よりもさらに大きな被害をもたらしてしまいます。

さて、今回の地震を見てもわかるとおり地震によって起きてくる災害は、ひとつの街をいともたやすく消失させてしまうのです。最も顕著であったのが津波でした。津波は震源が40kmより浅いもの、そして、マグニチュード7.5以上のときに大津波が発生するとされています（ちなみに、瀬戸内海では津波はほぼ無く、もし襲われても被害は少ないそうです）。津波の速さは、三陸沖地震の時で時速360kmと新幹線並の速いスピードです。津波においては、地震発生後に気象庁が津波の範囲や規模、到達時間等の津波予報を出して注意を促します。マグニチュードが大きいほど、波も高く強力で、被害も広範囲に及びます。波高が2～6mになると、家屋を損傷・破壊し人命の損失もあります。津波被害から建物を守ろうとする場合、基礎をしっかりとしたうえ、流れないような重い、基礎にしっかりと締結した建物にする必要があると著者はいわれています。そのためには、地震に耐える配慮とは別な配慮を必要とすることでしょう。

地震予知については、現在地震予知連絡会が、「東海地震が発生する確立が高い」として、東海地方を「地震防災対策強化地域」に指定し観測を行っています。しかし、それ以外の地域においてはそのような調査が行われていないため、科学の進歩している現代でも予知に関してはさらなる進歩が必要であるといえます。

建築を学ぶ者としては、災害から建物を利用する人々の命を守る建築物を作りたいと希望するのですが、現実的には難しい問題です。もし、そのような建物を建てるとしたら、核シェルターのような形態になってしまうかもしれませんが……。あくまで建築の観点で地震について語れば、昔から必須とされている地震予知は今の時点では意味をなさないと思います。もし、完璧に地震を予知することができるものと仮定し北海道沖地震が起きたとします。人々は避難する事ができますが、しかし、その人々の生活の基盤というものはなくなってしまうのです。そうすると、現状の建築物では“地震国日本”には住めないでしょう。でも、誰でもシェルターに住みたいなんて思いませんよね。

‘命あつての物種’とはいえ、我家が無くなってしまふのをただ見ているのは辛い事でしょう。斬新なデザインを生み出す私達には大切なことです。しかし、今回の地震をまのあたりに見て、私たち人間は建物の形

態について、もう一度原点に戻って考えてみることも必要なかもしれないと私は思いました。

最後に、北海道沖地震で亡くなられた方々のご冥福を祈り、被災地の早急なる復興を心から願う次第です。

「風の変様体—建築クロニクル—」

(伊東 豊雄 著)

A 4 中野 美良子

私がこの本を課題図書に選んだのは、この本の厚さよりも伊東豊雄という人物に興味があったからだ。しかし、正直にいうとかなり迷った。結局、読んだわけだが今はそれで良かったと思う。この本は年代を追いつながら、彼の建築論、作品の批評、他の建築家たちについて、旅行記等、伊東豊雄の大セールといった感じだ。私は伊東豊雄の建築に対して更なる関心を抱いた。

私が一番最初に知った伊東豊雄の作品は、東京遊牧少女の包であった。これには、とても強力なインパクトがあった。自分の考えていた建築というもののカタチが全く崩れてしまった気がした。だが、「中野本町の家」を見て、少しがっかりした。私にとってこの建築は衝撃を受ける程に素晴らしいと思えなかったからだ。彼は文中で、幾度か「中野本町の家」に触れている。彼はこの建築が彼のスターティング・ポイントであると言う程、重要視しているのが、とても不思議だった。私にとって、「中野本町の家」は使い勝手の悪い重苦しい家としか感じられないからだ。しかし、それは私が消費者として、つまり、住むとして考えているからであろうか。ただ、単純に建築として、芸術品として見たならば成功といえるのだろうか。でも、行き着くのは私には分からないのだということだけである。

伊東豊雄の原広司に対するものがとても面白かった。原広司という建築家のイメージは木端微塵となってしまった。松田聖子の歌を聴きながら、時にはマージャン卓を囲みながら、建築の創作が行われる。また、著者の言葉をそのまま借りると「確か山本理顕だったと思うが、ある時原邸を訪れたら、原さんが左手に飯茶碗を持ち、右手に箸を持って口を開けたまま動かず、子供番組に見入っていた姿が感動的でした」と話していた。」という事もあったらしい。私は思わず吹き出してしまった。原広司という人物を私は実際に知っているわけではない。しかし、原広司の建築は多少な

りとも知っている。彼の建築は現代的で機械的で、それからは生活感とか日常は決して見えない。そんな建築の親のあまりにも日常的な姿。しかも、あまりにも通俗的すぎる姿に親しみさえ感じてしまう。私個人の願いとしては、常にトップを走る建築家たちは完璧でいてほしいと思う。普通の人でいて欲しくないのだ。それは、かなり無理なことだろうし、そんな人は稀だろうが。

「アルミはアルミ以上でもなく、アルミ以下でもないことを認める眼」このテーマがとても気に入ってしまった。私にとって、伊東豊雄という人は金属の建築というイメージがあるからだ。このテーマの中で取り上げられるのは伊東豊雄の自邸である。彼は、アルミやステンレスといった類で自邸を造ろうと考えた。それは、現在の東京都においてはそれらがもっとも我々の身近にある素材だからである。昔は最も身近にあったのは木であり、土や石であった。だから、人はそれで建築を造った。私は金属やガラスといった素材の建築が好きだ。それはきっと、自分の中に機械や工業への多大な憧れと依存心があるからだと思う。機械は私たちの生活に欠かせない存在であるからこそ、それらに類する物を使うことで安心感があるのだろう。話を著者の自邸に戻そう。「アルミやステンレス、スチールガラスなどの素材は、木や土よりも身近にあるといえないだろうか。かつて丸太や日干しレンガを集めてきたようにアルミやスチールの部品を集めて家を造ったらどのようなものができるだろうか、前以て定められたノスタルジックな意味を排除して、アルミはアルミ以上でもアルミ以下でもない、そのような即物さで家を造ったらどうなるだろうか」と著者は述べている。でも、そこは伊東豊雄が一流の建築家である所以である。自動車の部品を転用したり、消防服の布地を用いたり、彼の集める素材は一風かわっていた。その風変わりなアイディアはつきることがない。そこが、彼の建築の魅力である。彼の自邸は金属で取り囲まれている。彼に対して、「冷たくはないですか」と聞く者に彼は答える。それこそが、先入観である。これこそが、自然なのである。唯それが我々の周辺環境を形成しており、そのようなものに囲まれた都市の中で毎日我々は暮らしているというのが現実であることを認めただけのことである、と。近代建築では、金属等を用いた建築は工業や機械への憧憬がカタチを成したものだっ

た。しかし、現代の建築においては、身近な物を利用した建築にすぎないのだと感じた。最後に、このテーマの文中で気になった言葉があった。建築物はその所有者の顔である、という言葉だ。と、すれば、伊東豊雄という人物は非常に魅力的であるということがいえる。

ノマドというレストランがある。私はこの建築がお気に入りであったので、本文中にたびたび出てきたのが嬉しかったのだが…。このノマドは本来ホテルであったのを土地買収の失敗により、急遽レストランに変えられたのだ。しかも、いつかはホテルとして建て直すために長持ちしてもらっては困るというのだ。若いディベロッパーがとりあえず簡易で建築を造って設けて、2、3年で解体しようというものである。これは、最近ではよくある話だそう。この話には無性に腹がたってくる。建築に対する侮辱だと思う。仮設性の建築が許せないとかいうのではなく、土地投機の付録として軽々しく扱うところが許せないのだ。自分の好きな建

築がそういったクライアントによって造られたと思うと、がっかりである。なんとなく、はがゆい気がする。私は建築の魅力の一つはその永続性にあると思う。誰もが認める建築は、その姿を後世へと留めて行く。いつまでも、認められ続け、残る建築をつくることはとても魅力的な夢だと思う。だから、そんな安易なクライアントは好ましくない。でも、少しはチャレンジ精神をくすぐられてしまうのだ。仮設でも仮設と感じさせない素晴らしい建築の制作に。なかなか、厄介なものであるが、別に私はそんなことを言えるほど立派な建築家ではないので関係ないのだが。

この伊東豊雄の本は、結構むずかしくて、読みごたえがあった。かなり、建築家にたいする幻想も打ち破られたりした。けれど、ずしりとくるような本で、いい経験になった。ただ、困ったのは、この本を読んでいるとむじょうに設計がしたくてしょうがなくなってしまった事だ。

新任教職員随想

不思議の国の呉高専

一般科目

木原 滋哉



テクノロジーは、私にとって、チンプンカンプンの存在です。この文章もパソコンを使って書いているわけですが、このパソコンもワープロとしてしか使ったことがないという有り様です。こんな私が、今呉高専にいるわけですから、人生わからないものです。

実は、私も中学生の時には典型的な理系少年でした。かなり昔のことなのでパソコンなどは身の回りになかったわけですが、それでも、アマチュア無線の無線機、顕微鏡、天体望遠鏡その他いろいろなガラクタに囲まれた生活でした。当然ながら、地元の佐世保高専を受験してみようと思ったこともありましたが、しかし、これが人生の転機になってしまいました。今はどうなの

か知りませんが、当時は私のように色弱の学生は、工業系、理系への進学への道が閉ざされていました。

それ以来、私は、すっかり文系人間に変身し、大学、大学院とずっとテクノロジーとかかわることなく生活してきました。ふと気がつくと、この十数年の間にテクノロジーが驚くほど急速に進歩していました。そのおかげで私たちの生活は便利になったわけですが、私と同じようにテクノロジーの進歩にとり残されてテクノロジーをよそよそしく感じている市民も多いのではないのでしょうか。

私の専門の社会科学の分野でも、例えば、環境、都市、経済などの領域は、テクノロジーの問題を抜きにしては考えられません。私は最近、いわゆるハイテク化が労働現場や社会構造にどのような影響を与えるのか調べてみようとしたことがあります。ハイテク化が高度な作業能力を必要とするだけでなく、新しい単純労働を生み出すならば、社会構造が分極化するのではないかと考えたからです。ところが、産業技術に関して門外漢なわけですから、結論が出せるはずありません。

こんな私が工業系の学校にいるというのはどうい

うことなのだろうか、と考えないわけにはいきません。しかし、考える以前に、次第に昔の理系少年の好奇心が甦ってきているようです。

高専の中を歩くと、見るもの聞くものすべてが珍しいものばかりです。測量実習をしている学生の姿、学生が持っている専門のテキスト、消し忘れられている黒板の板書、見たこともない機械や器具の数々、こうしたものを見ると、ワクワクしてしまいます。また、図書館には、都市、環境、産業技術などの本が整然と並んでいます。これらの本も私が遠くから眺めたことはあっても、実際に手にとって見たことなどなかったものばかりです。私のアパートにも数千冊の本がありますが、驚くことに、呉高専の図書館の蔵書は私の本とほとんど共通していません。呉高専は図書館でさえ私の知らない世界なのです。

私のように、テクノロジーに疎い人間にとって、呉高専は本当に不思議の国です。今までよそよそしく感じていたものが目の前に存在しているわけです。私は、すっかりこの不思議な国に迷い込んでしまいました。しかし、ここでは、見るもの聞くものすべてが珍しく、私にとって新鮮なものばかりです。これから、何を発見できるのか、どんな出会いがあるのか、どんな体験があるのか、不思議の国への興味は尽きそうにありません。

私は、この十数年の間にテクノロジーの進歩に遅れてしまい、すっかり「門外漢」になってしまいました。しかし、呉高専の空気の中で、私の知らない世界への関心、好奇心が高まってきているようです。もしかすると「門前の小僧」になれるかもしれません。

テクノロジーの進歩は、便利さをもたらすと同時に、テクノロジーの進歩に受け身であるしかない市民にはある種の無力をもたらしました。しかし、適切な機会とわずかの好奇心があれば、私のような市民でも必要に応じてテクノロジーに接近できるかもしれません。この数ヶ月で、不思議の国の呉高専の中でふとこんなことを考えしまいました。

私の学生時代

学務専門員

上中 達男



阿賀の町はかつて私の学生時代を過ごした思い出の町である。今から37年前の昭和31年4月1日阿賀駅に降り立った時のことを思い出す。当時の駅前にはバラック建てに裕次郎映画の看板が立ち並び、今のように舗装されない広場は埃っぽく、路面電車と駐留軍の軍用トラックが行い交い喧々としていた。

中学校を出た私は、希望を胸に坊主頭に学生服ので駅に降りた。海岸通りあった医科大学に就職するためである。昼間は研究室で助手をし、夜は阿賀工業定時制電気科に通う生活が始まる。夜間高校は経済的に昼間の高校へ進めない者の唯一の進路であった。不景気、就職難時代、多くは中学を出ると就職するのが普通の時代、夜間高校に行けるものは恵まれていたのである。

広・阿賀は鉄を打つ音の響く多くの工場のある町であった。夜間生は昼間は工場に散り、夜は電灯の下に集まった。学生は明るく、真面目で、仕事に悩みつつも小さな希望に託し働く者ばかりだった。私も希望に燃え2年間夜学に通うが、間もなく勉学への情熱を失い電気科から機械科に変わり、そして、休学、悶々とした学生生活末に退学。今でも当時のこと良く夢に見る。退学した夢、復学した夢、失業する夢である。はっとして目が覚める。心の葛藤する17、18歳のときである。祈りしも学友の1人と学歴不問の公務員試験を受験する。明日の食を得るために、夜間学校中退の学力のハンディを覚悟した受験であったが運良く合格した。やっと、腹一杯食えることができる。うれしかった。すでに19歳になっていた。さらに上級の試験に挑戦した。ただ人並みの生活を求めて。今は学校に自由に行ける。しかし、受験戦争、登校拒否に多くの児童が苦しんでいる。

私もかつて、小学校のときは体が弱く、長期欠席児の落ちこぼれ児童の一人であった。

今は大学生を頭に3人の父親。青春は短く、歳月の経つのは早い。

私の初マラソン



会計課出納係長
山根 義則

「今度の篠山ABCマラソンに一緒に行かへんか。むりして完走せんでもええんやから。途中でやめたらバスが面倒みてくれるし、もし、完走したら特製のTシャツがもらえるんや。ひょっとするとテレビに映るかもしれへんし、とにかく出るだけでも楽しいで。」という同僚の誘いに、一度は経験してみるのも悪くはないな、しんどいやろうけどひとつやってみるか、軽率にも、つい、「よっしゃ。」と言ってしまったのです。これが、そもそも私がマラソンというものを初めて経験することとなったいきさつです。職場の人達のあざけりじみた笑いやあきれ顔、中には「そんなバカなことやめときいな。」などの忠告をよそに、陸上競技とはおよそ無縁の私は、約3箇月、十分とはいえないまでも休日や昼休みの時間を利用したりなどして、万博記念公園外周などで、1日約5キロから10キロ、時には20キロと、完走を目指し本気で走込みをしました。専門書を読んだりして走法の勉強も一応しました。そのお陰で体重も5キロ近く落ちました。

そして、いよいよマラソン当日の平成元年3月12日を迎えたのです。恥ずかしげもなく頭には黄色地に「忍耐」の刺しゅう入りハチマキ、手には深紅の軍手、腰には栄養剤とバナナ1本の入ったウエストバッグを身につけ、スタートラインに並びました。参加者は1万人を超え、あの「アヘアヘ」で全国的に有名な間寛平も参加していました。頭上ではテレビ局のヘリコプターが旋回しており、私は、ビデオカメラに写らないかなんて思いながらヘリに手を振っていました。そして、11時10分、ピストルの音とともに、これから生まれて始めて経験するであろう42.195キロの道のり

の第一歩を、不安と開き直りの入り交じった複雑な気持ちで踏み出しました。沿道ではたくさんの地元篠山の方たちの声援を受け、10キロ位までは給水もあまりせず気持ち良く走れたのですが、中間点にたどり着くまでに、横腹は痛くなってくるわ、足の裏やふくらはぎはじわじわと痛み始めてくるわで、だんだんマラソンというものの怖さが身に染みてきました。横腹を押さえながら、えらいことになってしもうた、こんなしんどい思いをしてまでなぜ走っているんやろ、一体何のために、他のランナー達は一体何を考えて走っているんやろ、みんなアホとちゃうか、どこでやめたらか、などいろいろ考えながらもただひたすら足だけは動かしていました。この中間点是最初の関門で、20台位の収容者用バスがズラッと並んで待機しており、それが何とも異様な雰囲気、私には悪魔がおいでおいでと手招きしているような威圧感を覚えたのですが、なんとか無事通過。

そして、いよいよ恐怖の関門と言われている35キロ地点、ここを3時間40分以内で通過しないと閉鎖され、バス送りとなってしまいます。ここさえクリアすれば、ゴールまであと約7キロだ。係の人が、もう閉鎖用ロープを持って大きな声で「ガンバレーッ」と大声で叫んでいるのが耳に入った。もうちょい、もうちょっとやと自分に言い聞かせながら、痛みの続く重い足を引きずるように走り、3時間25分でクリアした時、もうここまで来たんだから何がなんでもとにかく完走（制限時間4時間40分）だけはするぞということだけが頭の中を支配していました。しかし、あと5キロという時になってくるとさすがに体はボロボロ。汗も出ない。だるさと空腹、ひざはもうガクガクで足全体が鉛をつけ



変わる仕事と自分



学生課

池元 浩一郎

たように重く、筋肉筋もひどくなるばかり、おまけに少なくとも2万回以上も地面をたたいたことになる足の裏はマメがぐちゃぐちゃに潰れたような感じで、一歩踏み出すたび、もう痛いというより「アチーッ！」といったような感じで、立っているのさえ苦痛でした。でも、とにかく足さえ動かしている以上ゴールには確実に一歩ずつ近付いているんだ、そしてゴールの暁にはおいしいビールが待っているんだと心の中でつぶやきながら、痛みを我慢してヨロヨロと走り？続けました。まわりのランナー達も私と同じような状況のようで、思わず、頑張りましょうと言わずにはおれない気持になりましたが、しんどくて声になりません。

そして、ついにあと百メートル程になった時、もうすぐ終わりだという思いが私を元気づけ、自分にまだこんな余力があったのかと錯覚するような速さでゴールに飛び込み(タイム：4時間19分)ました。そして、完走者だけが手にすることのできる完走Tシャツを若い女性係員から受け取った瞬間、ウワーっついにやったんやなあという感激で目頭がジーンと熱くなるのを覚えました。一緒に参加した同僚達も私が完走したのを見つけ、驚きの表情をして駆け寄ってきました。そして、肩を抱き合いながらお互いの健闘を称え合いました。走り終えた後のこの何とも言えない壮快感、42.195キロを走り抜いたこの満足感、何かでかい事を成し遂げたような充実感、これらがごっちゃになった気分は、多分マラソンを経験した者でないとわからないと思います。

私があの時もらったTシャツ、使い古して今はありません。でも、あの時の感激は決して忘れることはありません。そして、この初マラソンは、私にとって一生忘れることのできない大きな思い出となり、またこの経験は、私の人生の中できつといつかは役に立つものと信じています。

なお、後日放映されたテレビ放送(1時間番組)では私の雄姿？は残念ながら映っていませんでした。

まだマラソンに参加したことのない方、一度経験してみたいかですか。きつと何か得るものがあると思いますよ。

(注：当時私は大阪大学職員でした。)

私は、今年の1月に、この呉高等専門学校に赴任し、電気工学科内にて仕事をさせていただいています。赴任してから、はや8ヶ月が過ぎようとしています。分からないことが多く、生徒から質問がくるたびにあたふたしているような状況が多々あります。ときどき、未来の自分を想像してみるのですが、いつも、仕事に関しての不安と、自分に対する自己嫌悪を感じているような次第です。

この高专に赴任する前は、岡山のとある会社にて情報処理関係の仕事をしていました。そこでは主に、機器の制御を行うプログラムの設計・開発・パソコン上の事務データ処理用アプリケーションの設計・開発、および、新入社員教育を行っていました。開発にあたっては、C、BASIC、PL/Mという言葉を開発目的に応じて使いわけながら、パソコンをつかって仕事をしていました。基本的に、この手の仕事が好きなのか、朝から深夜まで一人でパソコンとにらめっこをしているような仕事内容でしたが、苦痛をまったく感じませんでした。しかし、新入社員教育という仕事だけはどうしても好きになることができませんでした。なぜかというと、仕事内容からいえば、自分のもっている基本的な技術や仕事の進め方を教えるというものです。このことをやればやるほど、自信がもてなくなってしまうからでした。自分では分かっている簡単なことを教えてみても、相手に内容が伝わらないというのは、まったくくやしくてたまらないものでした。

そんな私が仕事をかわり、「教える」ということに関しての本場である学校という職場にて働くようになりました。働きだした当初から、何とも言えない不安がありました。それは、「教える」ことに対する苦手意識もあえますか、それよりも、今までにしていた仕事とはまったくの畑違いである仕事に対する知識が不足しているからです。知識不足に対しては、実験を通

して、また、教官の方々に教えていただきながら、勉強しているところです。しかしながら、どこまでが必要最低限の情報なのか分からないので、全てを覚えようとしているせいか、本を開いてみてもなかなか思いどおりに頭に入っていくのが、今の私の現状です。早く必要な知識を修得し、一通りの仕事ができるようになることが、今の私の当面の目標としています。まわりの方々が親切にしてくださるので、ひとつひとつじっくりと仕事をこなしていきたいと思えます。

最後になりましたが、最近読んで良かったと思う本をご紹介します。それは、「マーフィーの黄金律 (ゴールデンルール)」(しまず こういち著)という本です。この本を読むきっかけとなっ

たのは、休日の暇つぶしのための何かおもしろそうな本はないだろうかと思い、本屋にてただなんとなく探していた時に、たまたま目の前にあった、という偶然からでした。本の内容はというと、日頃、どのような心構えを持っているのがよいのか、また、自分の未来をどのように思い描くかによって、今現在の自分がどのように変化していくのか、ということ、質疑応答に似た形式で簡単に書かれています。今後、自分が行動を起こしていく上で、また、自分の人生を活性化していくために、とても良い本だと思います。価値ある1冊だと思いますので、機会がありましたら、手に取っていただけることをおすすめします。

私の推薦する本

ライアル・ワトソン著

「生命潮流 (Lifetide)」

(工作舎)

一般科目 白川 洋二

「現代はなにごとにも確信がもてない時代である。われわれは今や自分たちの無知を認められるようになってだけでなく、永遠に知り得ない領域が存在するという事実も受け入れようとしている。」著者はこのように書きはじめる。近年われわれは科学的発明発見に自信满满だった。しかし驚くべきことに集中的に多額の費用をかけて研究したにもかかわらず、もっとも基本的な問題が解けないでいる。なぜわれわれは眠るのか、なぜ記憶というものが可能なのか。このような問いに対する解答はいまだない。

本書は科学のあらゆる領域にわたる成果を駆使した生命科学の集大成である。表題に示される通り、生命を潮流としてとらえるワトソンの観点が本書を貫流しているが、生命を単一のものに固定せず、流れとして、時間として、動態としてとらえている。

本書は4部から成り、第1部では、天体物理学から分子生物学、遺伝学にいたる諸領域に通じる著者の仮説が展開する。一生命の種子は星間空間で形成され、そこから撒かれた。その多くが地球に飛来して根を下ろし、成長を開始したが、それには地球の土壌で形成されつつあったユニークな物質パターンが関与した。一

地球上における生物圏の端緒である。第2部は地球生物圏の創造的進化の鍵を握る複製体＝遺伝子の統制の解明を試みる。しかし遺伝子システムではどうしても解明できない進化のありように直面して、ワトソンは「コンティンジェント・システム」なる大胆な仮説を提供する。第3部は人類、「人間」の進化と神秘へと切り込んで行く。考古学、形質人類学、文化人類学、大脳生理学を経て、流れ、ただよう意識の世界を語る。そして第4部では、生命と魂を根底において結ぶ神秘を探るワトソン流の考えが画かれる。観念に塗り込められ、規範にはめ込まれる危険にさらされている潮流としての生命の躍動をドライブしつづけるもの、これをワトソンは「自然の秩序」であるとす。偶然、チャンス、連続性、同時性といったものに物質的根拠を与えることによって「自然の秩序」を外在的力から内なる神へと固定して行く努力が試みられている。そしてコズミック・リズムに揺られ、未来の記憶をたずさえて地球上に生をうけたこどもを、いわゆるおとなにしてゆく現代の社会的、教育的環境に痛烈な批判を浴びせるのである。

私たちは、21世紀が目の前に見えるこの時期になってようやく、われわれ自身と自然とのかわりを感じはじめた。宇宙とその一部であるわれわれとを、ひとつの動的な総体として、また精神的であると同時に物質的である常に動いている一個の生体として感じるようになったのである。そういう意味で、本書は、宇宙

とわれわれ自身に関する、とてつもなく野心的や著述である。

ちなみに、著者ライアル・ワトソン (Lyal Watson) は、1939年、アフリカ、モザンビーク生まれ。アフリカ、オランダ、ドイツでの学究を経て、ロンドン大学で博士号を取得。動物行動学、人類学、医学、心理学など広い視野に立ち、フィールド・ワークを重視するライフサイエンティスト。クジラやイルカの行動学研究も駆使し一貫して生命と意識を結び神秘を追求する行動する科学者として知られている。

土質工学会編

「土質工学数式入門」

(土質工学会)

土木工学科 小堀 慈久

この入門書はB6版の手頃のものだけに、気軽に読むことが出来る。また、題名の通り種々の土質工学の数式の証明、解説が多く、語句説明、土質の概念の詳細と言ったものは限られている。いずれにしても、これから土質工学を学ぶ人にとっても、既に学んでいる人も、公式の理解に悩んでいるひとにとっては一つの助けになると思われる。

例えば、有効応力の概念は土質力学を学ぶものにとって重要な概念の一つである。これは、土粒子間が水で十分満たされ(これを飽和状態と言う。)かつ、水が逃げない状態で上から荷重をかけられた場合、地盤内では土粒子と水により荷重を支える。これを全体の応力、いわゆる全応力と言っている。このうち土粒子のみで支える応力を有効応力、水で支える応力を土と土の間隙の水圧と言う意味から間隙水圧と言っている。本書では模式図により土粒子断面積や土粒子と土粒子との接触面積等から有力応力を得ると言うように、わかりやすく解説している。しかし、実際的には直接有効応力を求めることは困難なので一般には全応力から実験的に求める間隙水圧を引いて求める。

また、クローン土圧とランキン土圧の相違についても基本的な考え方の違い、それに伴う土圧係数の相違が懇切丁寧に解説されている。また、自然災害による被害が最近、特に多くなって来た。中でも斜面災害による人的被害が目立つ。この関係の防災対策がいそがれるが、斜面全体の土質力学上の機構説明が重要であ

る。多くの斜面安定解析法がこの書物に簡潔に紹介されている。昨今、塑性力学を基本とした新しい安定解析法が出されているが、新しい理論解析に対しても基礎的には十分対処できる入門書であると思われる。

森口 繁一・〔ほか〕編

「Pascal プログラミング対話」

(共立出版)

建築学科 間瀬 実郎

Pascal というプログラミング言語を知っているであろうか。コンピュータに興味がある方であれば、一度は耳にしたことがあるだろう。では、この言語がどんな特徴を持っているかご存知であろうか。「構造化プログラミング言語」、「プログラミング教育に適している」、「Cによく似ている」、「記述が厳格で、面倒くさい」、「美しい言語」、「裏技がない言語」などその特徴を断片的に示す言葉はいくつか聞くこともある。しかしこの言語の本質を理解している人は、この稿を読んでいる人の中で果して何人いるだろうか。

かくいう私も、ソフトウェア工学の専門家ではない。この言語を正確に理解している訳ではなく、的確な紹介は出来かねるが、私が10年近い間、他の言語と比較した経験に基づいて、この言語とこの図書をここで推薦する理由を述べたい。

【Pascal は変数型宣言が必要な言語】

Basic や Fortran には、変数の型宣言が基本的には不要である。倍精度などの特殊な変数を用意する場合を別とすれば、変数の型宣言をしなくとも、実行可能な文を書いてゆくことができる。

変数の型宣言などというのは、だいたいタイギイものである。それは、宣言するたびに、エディタをヘッドまでスクロールせねばならず、しなくてすむものなら、せずにすませたいところである。そもそも変数の意味役割については、プログラムを書いている最中のプログラマにとっては百も承知で、そんなものをわざわざ掲げるのは、友達と遊ぶときに、いちいち胸に名札をつけるような、ナンセンスな気がする。

ところが例えば、何十年かぶりに開かれた中学の同窓会で旧友と会ったときに、全員の名前を思い出すことができるだろうか。親しかった友達の名は、すぐにでてくるが、目立たなかったクラスメイトなどは、顔

は憶えていても名前がでてこないこともある。そんな時は、名札を付けていたらどんなに助かるだろうか。

これと同じことが、自分の書いたプログラムでも起こる。しかもプログラムの変数などは、何十年どころか、数週間、ひどいときには、昨日書いたものでも、変数の名前と機能が一致しないことが頻繁に起こる。プログラムを何本も書いている人は、身に覚えがあるだろう。

Basic や Fortran などは、変数の型宣言が不要なため、実行文中のその場その場で、気ままに新しい変数を登場させ、エディタをスクロールすることもなく、スイスイとプログラムが書けてゆく。しかしそれでは、出来上がった自分のプログラムの中では、どこで作ったかも覚えていないような変数が、いたるところで、うごめいているという事態になる。またこのことは、他人の書いたプログラムに、自分が手を加える際にも大きな障害になることは、容易に想像がつくだろう。

変数同士を混同したことが原因で起こるバグは、一見うまく動いているようでも、実はとんでもないことをしてくれるものが多い。これは、コンパイラも見つけることができない、きわめてやっかいなバグである。

急がばまわれ。変数は、面倒でもすべて宣言するのが、後々のためである。そして、Pascal は、コンパイラが宣言されていない変数をチェックしてくれ、宣言されていない変数が1つでもあると、コンパイルは成功しないようにできている。

【Pascal は GOTO 文が不要な言語】

GOTO 文の機能はよく知っているであろう。「示してある行へジャンプしろ」という簡単な機能である。しかし他人の書いたプログラムを読んでいて、GOTO 文が出てくると、なんとなく憂鬱になりはしないだろうか。それは、今までせっかく一行一行順を追ってプログラムの意味を理解していたところを、GOTO 文は、いとも簡単にまったく見知らぬ行へ連れて行き、そこでまた一から出直せ、といっているようなものである。これでは、頭の中は、かくらんするばかりで、いやにもなるはずである。

ふつうの人間が読む小説などは、登場人物、ストーリーの展開など、すべて、最初から読んで行けば、理解できるように書かれており、GOTO 文など存在しない。もし小説に GOTO 文が存在したら、ジャンプした先には、聞いたこともない登場人物や、ストーリー

の文脈を推理するのに苦労するだろう。

つまり、GOTO 文による記述というものは、所詮人間が自然に理解できる範囲を越えており、これを理解するためには、頭に相当負担がかかるということである。これが憂鬱の原因である。

Pascal は、プログラムを構成する個々の機能を、「手続き」、あるいは「関数」という独立性の高い部品にわけ、これらを組合せプログラムを構成する。また、繰り返し、条件分岐などは「ブロック」でくくることで、まとまりをもたせる。これらの手法によって、Pascal は99%、GOTO 文無しでプログラムを書くことができると言われている。そのため、Pascal で書かれているプログラムの読解は、ふつうの小説を読むのと同じように、頭が混乱することはない。このことは、自分でプログラムを書く際にも、頭の中を整理しながら行なえることになる。

【Pascal は C への入口】

「言語はなにに使っているの？」と聞かれて、コンピュータ通と自他共に認める人であれば、やはり「C だよ。」と、さりげなく答えたいところである。別に C がソフトウェア工学上最高の言語というわけでもないが、今もっともトレンドな言語といえば、C ということになるだろう。実際、C の関連図書は、Pascal、Basic、Fortran のそれよりもはるかに多く見かける。

ところが、これだけ C がもてはやされているのに、C を使っている人が、読者の近辺に何人いるだろうか。電気系、情報系の専門分野に身を置く人であれば、C は常識かもしれない。しかし、これ以外の分野が専門で、とりあえずコンピュータでプログラムを作らなければならないという人に対しては、はたして C は親しい言語だろうか。

筆者も最近 C を使い始めた口であるが、C は、Pascal、Basic、Fortran とはちがって、コンピュータのハードウェアの知識を否応なく要求される、専門



性の高い言語のようである。初心者には、理解できない部分が多すぎて、とても薦めるべきではないと思っている。

しかし、Cで書かれたプログラムは、驚くほどコンパクトであるにも関わらず、細かい命令が書け、しかも関数、ブロック、変数宣言必要、GOTO文不要と先述のプログラミング上重要な要素をしっかりと持っている。つまりCは、基本的にPascalと同じ構造をとりつつ、ハードウェアに対する専門的な記述が要求される言語と私は見ている。したがって、Pascalを理解していれば、Cの習得はかなり楽にできる。しかし、BasicやFortranなどから入ろうとすると、新しいことが多すぎて、スムーズには行かないと考えている。

Pascalは、Cほど専門的でなく、さりとして、プログラミングの基本をおそろかにせず、それを正しく理解できるような仕組みになっており、プログラムの本質をしっかりと習得したい人には、これ以上の言語はないと私は思っている。

推薦した図書は、Pascalを独学でも学べるように、懇切丁寧な説明がなされている。出版されたのが、大型計算機の時代であったため、一部記述が古くさいところもあるが、説明はわかりやすく、現在でも十分使えらると思う。これから、本格的にプログラムを学ぼうとしている人には、ぜひPascalを、そしてこの図書を薦めたい。

新 着 図 書 30 選

〈人文・社会〉

◆芦部信喜著

「憲法」(岩波書店)

体系的な専門書でありながら、放送大学での4年間の講義録をまとめたものだけに、文章は平易で読みやすく、憲法の諸問題をバランスのとれた視点で解説している。重要判例も網羅しており、憲法全体についての概説書はこれが初めて。(アエラブックガイドより)

◆浅井信雄著

「民族世界地図」(新潮社)

民族について考えたり、論じたりして、いつも「酸素不足の中で動き回るような息苦しき」を感じる。その原因はわかっている。民族そのものがとらえどころのない存在であるからだ。この本には、世界のあちらこちらの民族や民族同士の争いについて書いたつもりである。しかし、「民族って何だろう」という基本的な疑問を抱きながらついに解明できなかったことを告白する。(同書序から)

◆五木寛之著

「いきるヒントー自分の人生を愛するための12章」

(文化出版局)

これはいわゆる「人生論」ではありません。また、生きる「思想」というようなおおげさなものでもあり

ません。タイトルどおり、生活していく上でのちょっとした「ヒント」です。私たちは、生きてゆくためには、たぶん「何か」が必要なのです。気軽な気持ちで読みながしてください。(著者からのメッセージ)

◆NHK新・日本人の条件プロジェクト編

「NHKスペシャル新・日本人の条件①～③」

(日本放送出版協会)

戦後日本人が求めてきた価値観の集積場であり、またその矛盾も集約された極限都市、東京を中心とした企業社会の歪みに迫った。より豊かにと、ひた走るなかで、私たち日本人は何か大切なものを忘れてきてしまったのではないか。「豊かさへの構図」の限界を見たいまこそ、日本人が失ってきたものを、改めて問い直すべきであろう。21世紀の都市、情報の世界が問われている。(同プロジェクトより)

◆中野孝次著

「清貧の思想」(草思社)

清貧とは、自らの思想によって積極的につくり出す簡素な生き方であり、貧乏とは大きく異なる。心の世界を重んじ、生活は可能な限り簡素に保ち、心を風雅の世界に遊ばせた西行、兼好、光悦、芭蕉、良寛。日本には清貧を尊ぶ思想、伝統がある。バブル崩壊を機に、発想の転換をすれば体現できると著者は言う。

(中国新聞書評より)

◆柏木 博著

「デザインの20世紀」(日本放送出版協会)

20世紀も残すところ6年。このあたりで20世紀のデザインの潮流を再考してみても良いのではないか。

本書は、20世紀のデザインを「近代のプロジェクト」「マシン・エイジの夢とデザイン」「現代デザインの諸相」の3章からまとめている。(篠部記)

◆斉藤忠男ほか著

「インダストリアル・デザイン」

(住まいの図書館出版局)

もののデザイン。我々の生活は様々なもので満たされている。日本のもののデザインは如何に生み出され、その結果なが優れたものとして残されたのか。

本書はマツダの3輪トラック、ソニーウォークマンなど、もののデザイン史に残る秀作を紹介している。(篠部記)

〈自 然〉

◆毛利 衛著

「毛利衛、ふわっと宇宙へ」(朝日新聞社)

オーロラ、日本列島、宇宙生活……

宇宙飛行士誕生とスペースシャトル8日間の旅、独占手記。飛行中のスペースシャトルと、毛利さんの郷里の北海道余市町、東京のNHKスタジオを結んで行われた「宇宙授業」で、余市特産のリングを使って無重力の世界を小学生に説明したことなどは、皆の記憶に新しい。(同書より)

〈共 通〉

◆渡辺昇一編

「ことばコンセプト事典」(第一法規)

言葉の物語世界を簡潔にまとめて、広がりを感じさせる、いままでにないタイプの事典である。

言葉の一般的な定義、類語、関連語、反対語、各国語表記、ことわざ、名言、引用句、クロスレファレンス等を示し、記述内容に関連する4つのジャンルの作品・参考文献を上げている。(図書係)

〈機 械〉

◆和栗 明著

「歯車の設計・製作とその耐久力」(養賢堂)

従来の歯車の設計法やその製作については詳しく述べていないが、歯車の加工、精度については詳細に述べてある。又、歯車の接触状態を単純化したローラ試験による面圧の強さの試験、さらには歯車試験とローラ試験の相関等について検討されており、歯車の基礎設計に必読なものと考ええる。(灘野記)

◆矢川元基著

「計算力学(1)」(養賢堂)

主として、FEM(有限要素法)とBEM(境界要素法)を使用した専門書であり、内容としてはかなり高度である。主な目次は、熱流動解析であり、細目は熱・電磁効果を伴う流れのシミュレーション、カルマン渦列の数値シミュレーション、音響問題への応用、亀裂進展過程の解析、鋳造プロセスのコンピュータ・シミュレーションである。(灘野記)

◆矢川・福田著

「計算力学(2)」(養賢堂)

AI(人口知能)がどの分野で活用できるか、その分野で実際に携わっている研究者が自分の分野について細述している。

目次は力学問題への定性的接近、連成現象下の構造設計、人口知能による材料設計、複合材料のエキスパートシステム、ニュートラルネットによる動的荷重場での配管システムの最適構造の決定等がある。(灘野記)

◆C. W. マッケイ、尾崎弘、橘啓八郎監訳

「マイクロコンピュータのデジタル回路入門」

(近代科学社)

コンピュータの動作を理解するための基礎知識であるデジタル回路をわかりやすく解説した入門書です。

各章とも、解説のあとに多くの問題が用意しており、これを解くことによってデジタル回路が段階的に理解していけるようになっています。(野原記)

◆福永・桑田・中里著

「図面の新しい見方・読み方」(日本規格協会)

図面を理解することは設計製図や製作現場においては大切なことである。

本書は図面の読み方、寸法の読み方をはじめ、寸法公差・面の肌の指示・溶接記号の読み方などについて説明しており、図面を見る人、読む人、使う人が理解するための書である。(河口記)

◆橋本文雄・山田卓郎著

「新編 機械加工学」(共立出版)

最近の生産加工技術の進歩に伴い、現在の機械工場がどのようになっているのかという観点から、実際の工場現場で使用されている各種工作機械および基本的な加工技術について解説してある。さらに、品種管理、生産管理についても、実際的な問題を取り上げて言及している。(河野記)

◆伝田精一著

「わかる半導体セミナー」(CQ出版)

現在の日常生活の中には、家庭電化製品を筆頭に、子供のおもちゃ、太陽電池で作動する電卓など、半導体を使った品物が氾濫しています。しかし、半導体がいっただいどういう役割を果しているのかを十分に知っている人はあまりいないのではないのでしょうか。本書はこのような半導体のことがよくわからない人に好適に入門書である。(赤尾記)

◆高原幹夫著

「光ファイバ」(パワー社)

光通信システムの急速な普及に伴って情報伝達の高速度化、大容量化が進展しつつある現在、その根底を支える光ファイバケーブルに関する基礎的知識はエンジニアにとって不可欠なものとなっている。本書は、光ファイバの構造、特性、製造法などを平易に解説したものである。(赤尾記)

◆鈴木正彦編著

「金属新素材活用ノート」(工業調査会)

近年、形状記憶合金、アモルファス合金、水素吸蔵合金など機能性材料として急速に開発が進んでいる、いわゆる金属系の新素材の機能の発現機構から具体的な応用までを解説したもので、新たな材料開発のためのヒントが得られる好書である。(赤尾記)

◆北田正弘、朝倉健太郎編著

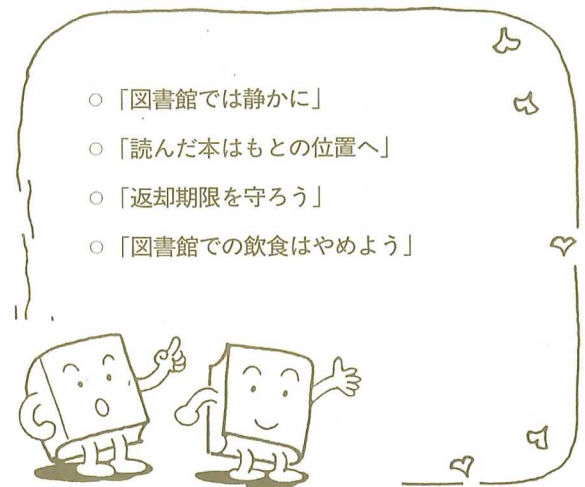
「先端材料を知る事典」(アグネ承風社)

「こんなに力や熱がかかる場所は金属部品でなくては!」と考えられていたものが、現在では、セラミックスやプラスチックにとって変わっている。それではセラミックスについて勉強してみようと本を買って読んでみても、よく分からない用語が沢山出てきてチンプンカンプン。そんなとき、必携の書である。(赤尾記)

◆合原一幸編著

「ニューロ・ファジィ・カオス」(オーム社)

デジタルコンピュータが成熟した現代ではコンピューティングの多様性が求められています。特に、ニューロ、ファジィ、カオスといった情報処理技術はこれからの工学の観点から見逃せないものがあると思います。本書では、新世代アナログコンピューティング技術研究の現状や将来性にを分かりやすく解説し、ニューロ、ファジィ、カオスの3つについて詳しく述べています。専門書というより入門書的なので読みやすいかと思います。(岩本記)



◆藤田英時著

「MS-DOS まかせの実用バッチファイル集」

(ナツメ社)

現在ほとんどのパソコンには、MS-DOS という OS が使われています。そのため、学生の皆さんがパソコンを使いたいと思っても、まず MS-DOS の知識や操作が必要です。MS-DOS には多くのコマンドがあり、覚えるのに大変苦労されていると思いますし、何度も同じコマンドをキー入力していませんか? そういう時に MS-DOS のコマンドを一括して実行するバッチファイルを活用すると効率が非常に上がります。本書は、初心者でも理解しやすいように実用的なバッチファイルを用途別にわけて紹介してある入門書です。

(中迫記)

〈土 木〉

◆土屋 淳、辻 広道著

「やさしい GPS 測量」(日本測量協会)

ここ数年測量業界をにぎわしているものに GPS がある。これは、GPS 衛星からの電波信号を用いて、観測地点を求めるもので従来の計測、測量方法とは全く異なった有利さがある。

本書は、現場で、GPS 利用時に必要な知識、注意事項、術語を図表、イラスト多数を交えてやさしく解説している。

(阿部記)

◆田村喜子著

「関門とんねる物語」(毎日新聞社)

関門トンネルは昭和19年9月に完成した世界初の海底トンネルである。難工事とされるトンネルは技術より技術者達の不撓不屈の精神力と技術的情熱により完成すると言われる。

本書は計画から工事竣工までを物語として、平易な文章で読みやすくまとめられている。人物を中心に描かれているためあきない。また土木技術者達の情熱がくみとれる。

(石井記)

◆宮本 裕ほか著

「例題で学ぶ構造工学の基礎と応用」(技報堂出版)

構造工学の本質を理解することを目的として、わかりやすい説明、種々の考え方による解法がなされてお

り、最近の手法であるコンピュータ利用のマトリックス構造解析の理解をめざしている。この本は、高専卒業後も役立つと思われます。

(中野)

〈建 築〉

◆建築フォーラム編

「現在茶室の試み」(学芸出版社)

本書は現代における茶室空間を写真や図版を使ってまとめた本である。従来、屋外に造られた茶室も、現代ではビルや美術館やホテルの片隅に造られる茶室も存在する。その様な屋内に造られている現代の茶室を本書では紹介している。

(篠部記)

◆山本理顕著

「住居論」(住まいの図書館出版局)

20年間に渡って試行された建築家「山本理顕」の調査・研究・設計活動を元に住居についてまとめられたものである。現実の家族の関係を住居(空間)の関係に置き換えた独自の住居計画学、住居論を展開している。

(篠部記)

まもろう
返却日



図書館からのお知らせ

新たに、今年度から下記のとおり実施していますので大いに利用してください。「利用の申込書」は、図書館カウンターに備えてあります。

【1. 文献複写サービス】

便利なコピーが利用されています。

- ・内 容 著作権法に基づいて、学習・研究のために、図書館の所蔵する資料の複写をします。ただし、ノートなどの複写はできません。
- ・複写料金

		学内者	学外者
1枚	私費	20円	35円
(B4以下)	校費	15円	
- ・規 則 本校図書館利用規則改正 第6章 第21条
本校図書館文献複写規則

【2. CD-ROM 資料の利用】

ちょっとしたパソコン体験ができます。

- ・内 容 パソコンで百科事典などのCD-ROM 資料を調べられます。当面、利用できるCD-ROM等は、次のとおりです。

資 料 名	備 考
1. 電子広辞苑	20万項目、図版2,000
2. CD-Word	13種17冊、8ヶ国語、500万語
3. 世界大百科事典	9万項目、図版9,200
4. オックスフォード英語大辞典	全12巻
5. 学術雑誌総目録	全12巻
6. MS-DOS 入門基礎知識編	
7. Shakespeare	35戯曲、6詩、ソネット全文
8. NHKできごと	4,000件、写真600、実況70
9. Lotus 1-2-3 R24J	作表計算処理

なお、機器の利用マニュアルと運用の詳細については、別途「手引」を作成し、図書館に備えて付けてあります。
また、ワープロ(一太郎)、図形作成(花子)などの利用もできますので、申し出てください。

【3. 図書館の学外公開】

生涯が学習時代。ご家族の利用を期待します。

- ・内 容 本校の教育・研究に支障のない範囲で、図書館を生涯学習の場として、広く社会に公開しています。
- ・規 則 本校図書館利用規則改正 第8章 第24条
本校図書館一般公開実施規則

文献複写申込書(複写依頼)

呉工業高等専門学校図書館長 殿

下記のとおり申込みます。

この申込みは、請求者(個人)による。複写の旨は印字が濃いこと。

申込書 支出品	種別名 貸与工業高等専門学校図書用	地区 0895721 0124 内2106	複写方法 本行複写	発行年 1981	頁数 180	冊数 1冊
申込書 支出品	種別名 貸与工業高等専門学校図書用	地区 0895721 0124 内2106	複写方法 他行複写	発行年 1981	頁数 180	冊数 1冊
請求者 氏名 住所 電話番号			請求書 支出品			
請求書 支出品			請求書 支出品			
			請求書 支出品			

CD-ROM等利用申込書
(利用の一般的注意事項を遵守します。)

氏名：
所属学科：
学年：
利用資料：枠内に○印を付けてください。

資料名	備考
1. 広辞苑	20万項目、図解2,000
2. CD-Word	13種17冊、8冊組、500万語
3. 世界大百科事典	9万項目、図解29,200
4. オックスフォード英語大辞典	全12巻
5. 学術雑誌総合目録	全12巻
6. MS-DOS入門基礎知識編	
7. Shakespeare	35戯曲、6詩、ソネット全文
8. NIHKできごと	4,000件、写真600、実況70
9. Lotus 1-2-3 R2.3J	作表計算処理
10. 現代用語の基礎知識	※
11. NHKできごと'80s	※
12. 三省堂ワードハンター	※
13. 春の祭典	※
14. 四季の星空散歩ほか	※

※ 10～14はCD-ROMユニット添付品

利用上の一舟受自白(注意事項)五頁

- ① 機器操作：CD-ROMの取扱いを丁寧にすること。
(一般的な機器操作がわからない場合は、あらかじめ係員に尋ねて使用すること)
- ② ゲームソフト等の持ち込み利用を禁止する。
- ③ ソフトウェア、ファイルの参照、消去、変更、転載、複製を禁止する。
- ④ ハードディスクの利用を禁止する。したがって、作表計算 (Lotus 1-2-3) の地理情報の保存とテキストデータの書き込みを許可されているCD-ROMデータについては、プリント出力印刷又は、利用者自身が所有するフロッピーディスクを使用すること。そして、印刷・書き込みした内容テキストの利用については著作権法を遵守すること。
- ⑤ 機器操作やCD-ROMの利用中に作動しなくなった場合は、ただちに係員に申し出ること。
- ⑥ CD-ROMの検索と作表計算 (Lotus 1-2-3) の利用に際しては、あらかじめ備付けのマニュアルを熟読し、利用すること。
- ⑦ 利用のマニュアルにならぬことについては、係員の指示に従うこと。
- ⑧ 以上のことについて、遵守しない場合に不測の事態が生じた場合の責任は、利用者本人が負う。

第1号様式

平成 年 月 日
図書館利用申請書

呉工業高等専門学校図書館長 殿

貴校図書館を利用したいので、許可くださるようお願いいたします。
なお、利用に際しては、図書館一般公開実施規則を遵守します。

申請者
住所
ふりがな
氏名
職業 (勤務先)

図書館利用許可書

図書館利用許可証
第 号

許可年月日 平成 年 月 日
交付年月日 平成 年 月 日

氏名

図書館長	庶務課長	図書館長	受付
------	------	------	----

編集後記

今年の夏は、記録的に雨の多い夏であった。

学生にとっては、海へ山へと楽しい計画が雨に流れて残念! というところか?

雨が多いと部屋にいる時間も長くなる。例年になく読書時間も多い夏であったろうか?

読書する機会と時間を大切にしたい。

今年の夏の読書の成果をまとめた「図書だより第29号」が発行された。発行に協力して頂いた皆さん、どうもありがとうございました。

(図書館長補 篠部 裕)